

Nagoya Noh Theater
September 2017

平成29年

9月3日(日)

前売券発売6月30日(金)

一部 10:00開演 (9:30開場)

能 「枕慈童」(喜多流)
シテ 長田 郷

狂言 「長刀應答」(和泉流)
シテ 井上松次郎

能 「三山」(宝生流)
シテ 衣斐 愛

三部 14:00開演 (13:30開場)

能 「百万」(金剛流)
シテ 加藤 かおる

狂言 「千切木」(和泉流)
シテ 佐藤 友彦

舞囃子 「紅葉狩」(観世流)
シテ 祖父江修一

能 「野守」(金春流)
シテ 本田布由樹

名古屋能楽堂 開館20周年記念

【能楽師が20周年におくる能・狂言20番】

十年ほど前、名古屋金春会の父の舞台は忘れられません。シテ方、ワキ方、囃子方、すべてが大きな河の流れのようにひとつになり、地謡にいた私は、その流れの一部になった感覚でした。自分もいつかシテとしてああいう舞台をしたいと思っています。

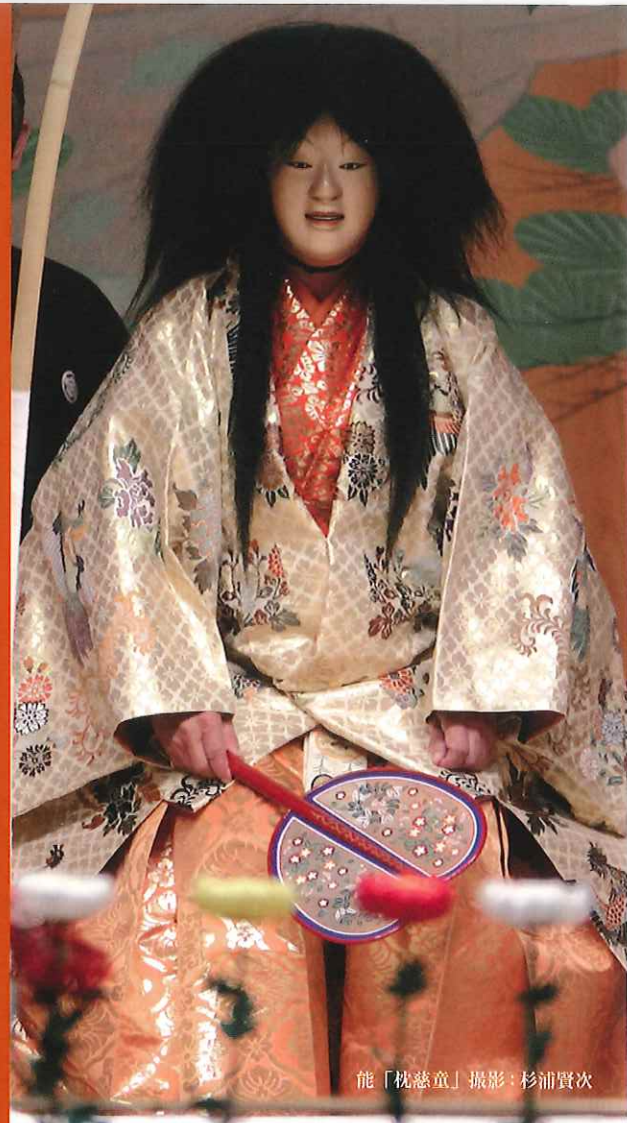
〈野守〉は後場の動きの豪快さも見せ場ですが、前場の野守の老人の演技もじっくりと取り組みたいところです。後の鬼神も春の野の守り神のような存在で、全体に原初的な雰囲気です。よい意味で洗練されすぎていない、「土においがする」と言われる金春流らしさを出してゆきたいと考えています。【本田布由樹 金春流シテ方】

ご来場の方に抽選で素敵なプレゼント!

本公演にご来場の方の中から抽選で各10名様に今澤美和師製作「作り物ミニチュア」他 能楽グッズをプレゼントします。

※ご入場の際にお配りするパンフレットに応募券(ご応募の締切は一部・二部各休最終了まで)が入っておりますのでご確認ください。

名古屋能楽堂 九月定例公演 能楽普及公演



能「枕慈童」撮影：杉浦賢次



能「百万」撮影：ウシマド写真工房

名古屋能楽堂 九月定例公演 (能楽普及公演)



■一部 午前10時 開演
能 枕慈童(喜多流)

シテ 慈童 長田 郷
ワキ 勅使 高安 勝久
ワキシレ 從臣 楳元 正樹
笛 大野 誠
小鼓 船戸 昭弘
大鼓 河村 総一郎
太鼓 加藤 洋輝
後見 長田 昭子
平塚 昭子
福田 勝 栗谷 浩之
高林 昌司 高林 伸二
伊藤 英毅 松井 俊介

狂言 長刀應答(和泉流)

シテ 太郎冠者 井上 松次郎
アド 主人 木田 高義
アド 何某 野村 又三郎
立衆 藤波 徹
立衆 伊藤 泰
立衆 野村 信朗
後見 今枝 郁雄

能 三山(全生流)

前シテ 里の女 衣斐 愛
後シテ 棧子の蓋 武田 伊左
ワキ 榎子の蓋 飯富 雅介
ツレ 良忍上人 橋本 幸
ワキシレ 從僧 鹿島 俊裕
アイ 里人 後見 今枝 郁雄
笛 大野 誠
小鼓 後藤 嘉津幸
大鼓 河村 真之介
竹内 孝成 東川 尚史
石森 智幸 和久 壯太郎
竹内 孝成 和久 壯太郎
平田 正文 水上 優
内藤 飛能 澤田 宏司

■二部 午後二時 開演
能 百万(金剛流)

シテ 百万 加藤 かおる
ワキ 百万の子 中嶋 彩音
ワキ 男 楳元 正樹
アイ 所の者 野村 又三郎
笛 鹿取 希世
小鼓 後藤 孝二
大鼓 河村 総一郎
太鼓 鬼頭 義命
後見 豊嶋 三千春
竹市 幸司
赤星 恵美 山根 泰子
大川 磨美 鈴村 昌美
熊倉 眞知子 羽多 野良子
田中 春奈

狂言 千切木(和泉流)

シテ 太郎 佐藤 友彦
アド 当屋 井上 松次郎
アド 太郎冠者 井上 蒼夫
アド 妻 鹿島 俊裕
何某 藤波 徹
立衆 伊藤 泰
立衆 野村 信朗
後見 松田 高義

舞離子 紅葉狩(観世流)

シテ 祖父江 修一
笛 竹市 学
小鼓 後藤 嘉津幸
大鼓 河村 裕一郎
清沢 一政
久田 勘助
松山 幸親

能 野守(金春流)

後シテ 尉神 本出 由樹
前シテ 山伏 橋本 幸
ワキ 山伏 松田 高義
アイ 里人 竹市 学
笛 竹市 学
小鼓 船戸 昭弘
大鼓 河村 真之介
太鼓 加藤 洋輝
後見 小野 瀬洋
本田 芳洋
小島 芳樹 佐藤 俊之
鬼頭 尚久 金春 穂高
廣瀬 雅弘 本田 芳樹

◆能解説 「枕慈童」(まくらじどう)
魏の文帝の勅命により、勅使が薬水の源を探りに、真山へ赴くと、山中で慈童に出会う。慈童は周の穆王に召し使われた者だと名乗るが、周の時代からは七百年も過ぎている。妖怪変化かや怪しんだ勅使が聞く、王の枕をまたいだ罪でこの山に流された。その時穆王から賜った枕に書かれた偈の妙文を写した菊の葉においた露のしずくが不老不死の薬となり、それ以来年を取らなかつたことは慈童は気づく。慈童は勅使の前で喜びの舞を舞い、帝に長寿を捧げて、祝福の言葉述べやがて庵へ帰っていく。

◆狂言解説 「長刀應答」(ながなたあしらい)
伊勢参宮に参詣予定の主人は、留守中の来客を、長刀應答しておくと太郎冠者(弓使)に云い付けて外出します。長刀應答の意味を知らない太郎冠者は、訪ね来る檀那衆に長刀の刃を突き付けて応対し...
今では最早死語であるが故に上演機会も少ない本曲ですが、狂言に残る古き良き日本の端を伝えたいとの思いから選曲しました。「応答」「会釈」と書いて「あしらい」とも読む。「あしらい」の本意をお楽しみください。

◆能解説 「三山」(みつやま)
融通念仏を広めて大和国に着いた良忍上人は、耳成山のふもとで所の者に大和三山を教えてもらう。そこへ一人の女が現れ、香久山に住んだ臙手公成という男が耳成山の柱と、敬傍山の榎子をもとに寵愛していたが、いつか榎子の方に傾き、それを恨んだ榎子が耳成の池に身を投げたという昔物語を述べる。そして、甲斐を請いつつ消え去る。(中入)上人が弔つている、やがて榎子、次いで榎子の霊が現れ、互いに打ち合つて争つが、西方浄土に生まれ変わるうと上人に重ねての回向を頼む。

◆能解説 「百万」(ひやくまん)
男が拾った子どもを連れ、嵯峨の清涼寺の大念仏に赴く。男が門前の者に面白いものを見せればほしいと頼むと、百万という女物狂がよいと言って自ら念仏を唱えはじめる。すると百万が現れ、門前の者の念仏を下手法と言って、自ら念仏を唱え出す。百万は子を取ったことにより心が乱れており、その心のままに捧げる曲舞を舞う。子どもは百万が自分の母親である気が男に告げる。百万は子どもと生き別れてしまった身の上を語り、法案の舞を舞う。男が百万と子どもを引き合わせると、喜びの涙にむせび、親子は連れ立って奈良の都へと帰つてゆく。

◆狂言解説 「千切木」(ちぎりき)
連歌の初心講(初心者)の集い、当番となった主人は、仲間を集合を呼び掛けますが、日ごろ何かと口煩い太郎を誘わずに講を始めます。これを聞きつけた太郎は自ら出向き、「何故声を掛けぬ」と難癖、悪態をつけている...
人前では強がりな男もその実態は小心者、今も昔も変わらぬ人間ドラマです。「千切木」とは「乳切木」とも。胸の高さ(約150cm程度)の木樺を指します。

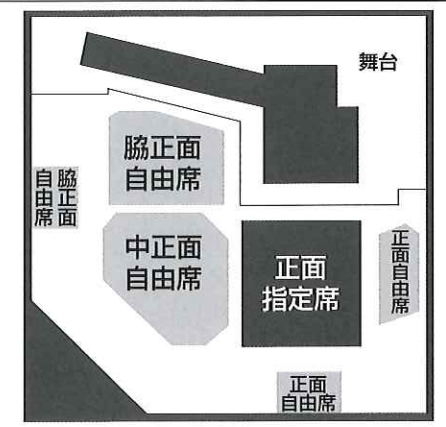
◆能解説 「野守」(のもり)
羽黒山の山伏が葛城山へ向かう途中、春日野の野守の老人から昔鷹狩りの際に見失った鷹の姿を水鏡に映し出し、捜し当てたことを聞く。山伏がその野守の鏡を見たいと言つと、老人は鷹を映した水鏡を見せたいと言い、姿を消した。鬼神が住むという塚の前で山伏が折つてると、光り輝く鏡を持った恐ろしい鬼神が現れる。鬼神は鏡で天地のすべてを鏡に映し出し、大地を踏みならすと奈落の底へ去つて行く。

[受講チケット] 九月定例公演とのセット券500円、一般券1,000円 ほか
◆【一部】は能「枕慈童」「三山」、【二部】は能「百万」「野守」のあらすじ、見どころを解説します。詳細は事前学習講座チラシをご覧ください。(一部、二部それぞれの受講チケットをお求めください。)

九月定例公演事前学習講座
8月19日(土) 【一部】10:00~12:00 【二部】13:30~15:30

Table with ticket prices: 前売 Advance sale 4,100円, 自由 Non reserved plus ¥500 on the day 3,100円, 学生 Student under 25 years old 2,100円

前売券取扱所 Ticket Office
名古屋能楽堂 TEL.052-231-0088
名古屋市文化振興事業団チケットガイド TEL.052-249-9387



公益財団法人 名古屋市文化振興事業団 TEL.052-249-9385
「友の会」会員募集中!